
うそつき島流し

糸みじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うそつき島流し

【Nコード】

N7852U

【作者名】

えみじ

【あらすじ】

軍艦島がひとつといという異能者の楽園もとい隔離施設になってから早十年。本土発症者という稀有な異能者であり何も知らない転校生の俺

こと八橋世橋がお送りする、

可愛いあの子達とのうふふな学園生活！（予定）や

お約束なイベント盛りだくさんな学園行事！！（予定）とか

気になるあの子と一つ屋根の下！？な寮生活！！！！（予定）なんかも！！！！

とにかく！使い古されててもこの言葉がぴしゃりとくるね！
青春ドタバタラブコメディ！！！！

あらずじってこんなんでいいの？

つかこれ、ほんとにこんな話なの？予定多くね？

・・・まあいいや、俺うそつきだし。

以上！八橋世橋でした！変な名前ですがよろしく！！

「えー、1980年茨城の山中の寒村で記録上最初のひととい発症者が現れました」

三時間目、疲れが出てなおかつ昼休みにもまだ遠いという一番面倒くさい時間帯

教師の説明も耳からすっぽぬけていく

そんな中俺はとりとめもなく、ここ波止場高校が誇れるポイントを考えていた

海が目と鼻の先

海が目と鼻の先なので夕方ごろに見える夕日が綺麗

他には・・・他には・・・

「このひとといというのは人間が本来備わっているものをなくす変わりに

本来人間に備わっていない能力、私たちは異能と呼んでいますが、その異能に目覚める現象のことを呼びます」

これ以上思いつかなかったので右隣に聞いてみた

「なあ、この学校のいいところって何かな？」

「風紀委員になれば少し行き過ぎた指導でも見逃されることじゃない？」

長いポニーテールを揺らしながら勝気につりあがった目を輝かせながらそんな事を言う

「行き過ぎて教師もおまえにびびってるだけだろ」

「んだとお？それでも教師からもラヴレターもらったことあるんだけど？」

普段は凶暴風紀委員長として恐れられているこいつだがライブの時はすごいらしい

なんでも去年の文化祭ライブの後のラブレターの数は50を超える
とかなんとか

見たことないから内容はわからんが

「そして一年間で爆発的にひととい発症者が続発

この間に異能を使った犯罪もありました」

まあ、とにかくこいつに聞いた俺が馬鹿だった。左隣に聞いてみよう
「なあなあ、この学校の誇れるところってなにかな？」

「日本でもトップの頭脳を持った生徒会長率いる生徒会じゃないか
しら？」

教師陣も優秀すぎて何も指導してないらしいわよ」

言いながら長い黒髪を掻きあげ、スツとした細い目でこちら見てきた
本当に性格意外は素晴らしいとは思ってたが・・・

「流石生活指導部の山梨先生が触らぬ神に祟りなしっていつてるだ
けはあるな」

「生活指導部の山梨・・・っと」

そういつて黒い手帳に山梨先生の名前が刻まれた
思わず背筋に寒いものを感じてしまった

「これに対応するため急遽政府がとった対応が、当時無人島だった
軍艦島を隔離施設

とする政策だったわけです」

「なあ、この学校のいいところって何かな？」
意中の相手である前の席にも聞いてみる

「んー？・・・ああ、食堂おいしいよね食堂」

「座れたことねえからわからねえな！！」

この学校に連行もとい転校してきて一ヶ月
食堂の席に座れたことがまだ一度もない

「あー、そうなんだ・・・今日の昼にでも行ってみる?」

「遠慮するよ・・・」

行きたいのは山々なんだけどなあ・・・

「ちなみにこのひとといというのは現在遺伝的に発症する場合が9
9割

そしてまれに、八橋君のように異常発症するのが0・1割ですね」

お昼休み直後の食堂前はこの島で一番危険だから死にたくないなら
近づくなと

この島に初めて来たときに説明を受けた

なんのことかわからず一度だけ誘われるがままついて行ったことがあるが

まさに食堂前は戦場とかしていた

「んー? だらしないわね世橋、この前のあれでびびったの?」

あざ笑うかのように右隣が言ってきた

「目の前火の玉かすって行ったらびびるだろ・・・」

「だらしないうってんじやないわよ、それでも本土発症者なの
?」

「バカヤロー、俺のは本土発症者括弧笑だよ」

「括弧笑ってなによ」

「なんちゃってみたいなの?」

「なるほど」

「否定してほしかったです」

「だって・・・ねえ?」

右隣が左隣に話を振った

「確かに声真似が出来るだけって・・・ねえ?」

左隣が前の席に話を振った

「宴会芸みたいだよね宴会芸」

「よっ! 宴会課長!」

「……………」

目頭が熱くなってくる

この軍艦島に連行されてくるやつは大きくわけて二通りにわかれる
まずひとつは死刑を食らった重罪人が秘密裏にモルモットとしてつ
れてこられるか

そしてもうひとつは本土で異常発症した奴かのどちらかだ

俺は後者な訳だが、政府の方針でひととい発症者の隔離が決められ
隔離が完了してからの本土での発症者はこの三十年間で3人
その全員がとてつもない異能者だったらしい

なので本土発症者である俺はそれなりにすごい異能がついているは
ずだった

だけど蓋を開けてみれば声を真似るだけの能力というわけだ

しかも何を失くしたのかという重要な部分がわからなかったため現
在研究者達の

研究対象になってしまった。本土発症者でどうでもいい異能に目覚
め、

なおかつ失くしたものがわからないというのは前代未聞だらけらしい

キーンコーンカーンコーン

「区切りがいいので今日はここまでですね。号令」

「きりーっ。きょうつけー。れーい。」

「ありがとうございますー」

挨拶を終えると教師が出て行った

「それじゃよばし、食堂いってみよう、食堂」

「……………」

さっきの会話を聞いていたのだろうか

「青海さんの誘いを断るなんて宴会部長としてどうですか？」

「勝手に昇格させんでくれ……………」

「つか世橋はもう少し無い知恵ふり絞って考えなさいよ。」

青海さんがいれば食堂の席なんて座り放題よ？」

「 そんな虎の威を借るキツネなんて俺のキャラじゃないだ
る? 」

「 いやいや、あんたもろにそんなキャラじゃない・・・ 」
「 な、なんだとこんにゃ 」

「 いいから食堂いくよ食堂 」

制服の首根っこをつかまれて連行される

すごく嬉しいのだがこの格好は恥ずかしすぎる

「 わかった! わかったから離してくれないか? 」

「 んー? わかったならいいよ。早く行くよ 」

食堂に行こうと廊下に向かう

廊下に出るまでに聞こえた舌打ちの数は25回

このクラスの男子の数は18人

んー・・・女子にも人気があるとは中々の競争率ですな

「 はあー・・・ 」

目の前に繰り広げられる光景に呆然とする

火、水、氷、多分雷、土色のミノタウロス、不自然に浮いている何

かの破片

謎の光球、水竜、降り注ぐ天使の羽、怪しげな霧

そして何よりときおり聞こえてくる断末魔

「・・・ありえねえ。」

俺は避難するように食堂の隅のほうに座りながら目の前の阿鼻叫喚
を眺めていた

ちかちかしすぎて目がいてえ

つかあそこ空間歪曲してるところあんぞ・・・

「 おっ、やつはしじやねえか 」

「 うわ、うぜえのきたよ。めんどくさいなあ 」

「 お前心の声漏れてんぞおい! 」

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「……。」

「いじうぜ?」

「あ、ああ……いきなりの最低の扱いに思わず呆然としちまった。」

「気にすんな……。」

「じゃあな、金魚の糞とNさん」

「いやあ、楽しい友達だなあ」

「てめえが八橋か?」

いきなりそんな声が聞こえてきた

今日は千客万来だな。Nさんが去った方向の逆方向から

いかにもな風貌な男がやってきた

上履きの色を確認。黄色つてことは上級生かぁ……

「どこ中ですかこの野郎!」

「む、無茶苦茶なやつとは聞いてたがまさにだな」

「出身中学の確認は大事だろうが!」

「その手にゃのらねえよ。今までのやつらはそれで乗り切ってきたのかも」

しれねえが、俺はそんな甘くねえぞ」

対外の奴は戦意を失って帰ってくのに面倒くさい奴だな

「つかさ、なんでやたら絡まれんの?俺」

こここのところ毎日絡まれている気がする

「ああ?青海さんに手だしってからだろ?」

マジか……

「知ってるか?青海さんファンクラブのおまえをボコった場合の報奨金」

いや、そのファンクラブの存在知らないし、賞金首扱いとか夢にも思っていないし

とりあえずちよつと高いリアルな数字出して言いつらくしてやる

「5万」

「20万」

「お金はもつと大切に使おうよおおおおお!!!」

思わず掴みかかってしまった。

上級生はすぐに俺の腕を振りほどいていったん距離をとると

「まあ、そういう訳でおまえをボコらねえとならねえんだよ」

「お金のために人を殴るなんてみつともないぜ・・・？」

「いや青海さんファンクラブ会員番号289としての使命だ・・・」

「私怨とかもつとみつともねえよ!？」

言うが上級生はやる気らしく素早く動き出した

迷わず俺は逃げ出した

「ま、まちやがれっ!」

『ひととい』と一般人が喧嘩する自体ありえないのに、更に能力がなにかもわかんないやつとやるなんて論外だ

こっちにきて能力者と喧嘩をしてノシタのは一度や二度じゃないがそのどれもが事前の情報があればまず無理だっただろう

というわけで逃げる。

本当は食堂で待っていなければいけないのだけど事情が事情だ
食堂で優雅にランチとか言ってる場合じゃない

「まてごるあ!俺のウィンドアッパーを喰らいやがれ!」

うわあ、ありがたいけどバカじゃねえのこいつ・・・。

風の付加系か・・・?、やれないこともないな

作戦を考えながら全力で食堂を駆け抜けた

入り口のところで待ち合わせをしていた人物の姿が見えた
噂をすれば影か

「わり!今日食堂パスだわ!」

「え?約束したでしょ?約束」

「ほんとわりいな!」

一瞬切なそうな顔をしたように見えた

むしろそう思いたい。案外脈あつたりしねえかなあ・・・

「さてやあああああ！！」

おっと作戦作戦・・・

闇討ち

言葉の響きがいいよね、うん。まさに理想系

不意打ち

闇討ちには負けるだろうけど四文字なのが絶妙な感じだと思う

騙まし討ち

これまたいい響きだと思う。五文字というのがさらにポイント高い

今回は不意打ちでいこう。

丁度人がまばらになり、曲がり角が見えてきた。

もう少しで捕まりそうだと思わずのためにスピードを落として・・・と

丁度後二歩でも詰めれば捕まりそうな距離になったところで曲がり角にたどり着いた。

相手の視界から消えるように素早く横っ飛びした

確認せずそのまま着地と同時に右こぶしを今曲がってきたところへ全力で放り込む

「ほぐっ!？」

その全力のこぶしに出会い頭にぶつかる上級生

ボグツといういい感じの感触が拳から伝わってくる

まんまバカじゃないかこいつ

丁度鼻にめり込んだらしく上級生は鼻血を撒き散らしながら仰向けに倒れた

最近感じることだけど『ひととい』ってというのはどうも能力に頼りすぎて

正攻法でしかこないというか、ダーティな手段に弱いように思う。

まあ、そんなことは今はいいとして、今日の昼食をどうするか考えないと・・・

床に倒れた先輩を見つつそんな事を考える。

ドグッ

わき腹に何かがめり込んだ感触

一瞬で呼吸がおぼつかなくなる

背後からの一撃なのは間違いない

つかマジで痛い、体に力が入らなくて膝をついてしまった

いや、朝食抜いといてよかつたわ。これ胃に何か入ってたら吐くって

つか誰だこの野郎、後で覚えとけよ

そう思つて顔を後ろに向ける

見たこと無い顔が6人

え？6人？多くね！？

この人数でランチとか死ぬレベルだろ

どうすつかなあー、とりあえずどうにか曲がり角まで戻つて

姿見えなくなつたら生活指導の島田先生の声真似でもして

脅かすぐらいしかないか・・・

いけっかなー・・・リアルに体重いんだけどなあ・・・

なんとか体を動かさそうとしたところで

先頭に立っていた身長の高い男子生徒が片腕を動かした

何をするかわからないのでとにかく後ろに飛ぶ

次の瞬間天井を見あげていた

わき腹にあんだけいいのもらつたら動けるわけねえか・・・

とりあえず一発いいのをもらつたので

先頭の奴は風の操作系だというのはわかつたけど

だからといって体が動かないんじゃない意味がない

遠くで大勢の笑い声が聞こえた

ああ、マジうつぜえ。一人一人闇討ち決定だつっの。

まあ生きてたらだけどさ

「・・・よばしどうしたの？よばし？」

”また”情けない事になりそうだ

もちろんいじめられてるなんて言いたくないので

黙っていると質問する相手を変えたように

「・・・あなた達何してたの？」

「な、青海さん！そんな異常者なんかほっという僕達とお食事しませんか？」

「いじめはいけないよいじめは。」

瞬間6人が全力で駆け出した音がした

逃げたな・・・。。。

バフツ！ げふっ！！！！x6

「よばし大丈夫？よばし」

「うおっ！」

近距離にいきなり青海の顔が出てきたので思わず情けない声を上げてしまう

それほどまでに近くで見た顔が綺麗だった

「助かったよ青海・・・」

一応お礼を言つて、体を起こしにかかる

ズキンツとわき腹に嫌な感覚がするけど、無視して体を起こすと不機嫌そうな顔が視界に入る

「どした・・・？」

「・・・。。。。。」

「黙ってたらわかりません」

「名前がいいな、名前」

「ぶばあっ！！」

一瞬で顔がゆでだこになったように思う

「顔真っ赤」

一瞬で顔がゆでだこになったようだ

「わ、わりい。そのあれだ、照れる」

二人だけの秘密の約束

頭の中でそんな言葉が流れるだけでも顔が熱くなる。

「私は名前で読んで、名前」

そのせいであらぬ誤解を受け、混沌の学校生活になったのはここだけの話

「あー……えっとー……紅」

「うん……食堂いこうか食堂」

「あーその前に保健室にだな」

「食堂いこう食堂」

猫掴みされたまま引きづられてしまっ

「わ、わかった！わかったから手を離してくれ！」

これで青海……じゃなくて紅に助けられたのは二回目
本当に情けない。

つそ二回目

嫉妬と殺意にまみれた昼食を終えての五時限目

そもそも青海紅とは何者なのか？という事を俺は改めて考えていた
青海紅。くれないと書いてもみと読む変わった名前

容姿端麗。身長、体重普通。

俺の好きな子。寂しがりや。変わった口調。

何を考えてるのかわからない。

何かを強制するときはず後ろの襟を掴む。

好きな色はみど・・・ごふっ！！

邪な思い出が脳を掠めたのであわてて追い出す

気をとりなおして・・・

島の中で多分一番のひととい。能力は神託。

なくしものは知らない。つか極秘らしい。

彼女の異能のおかげで現代科学は百年先まで進んだとかいわれてる
ので

ついた通り名がアカシックレコーダー。

両親は幼いころ他界。兄弟はなし。

現在は島の施設である寮で暮らしている。

趣味は不明。学校内にファンクラブあり。

ここだけの話、俺と同じ最重要研究対象。

うーむ・・・。高値の花という言葉がピシヤリとはまるなあ・・・
だがしかし！

彼女と俺は同じ寮暮らしという他の奴にはあまりないアドバンテー
ジを有している

さらに！ゲームだったらフラグが立っているほどのイベントも消化
している！

いける・・・いけるぞ八橋世橋・・・！

「じゃあどう、世橋君」

「先生、妄想してて聞いてませんでした」

「素直でよろしい、前かがみでいいから廊下に立ってる」

未来から来たネコ型ロボットのアニメが大好きな先生の授業中の罰はいつもこれだ・・・。

「あんたもこりないわねえ・・・」

廊下に立っていると右隣の風紀委員長が出てきた

「どっかお出かけ？」

「ちよいと施設にね。もしかしたら格上げかも」

ひとといは、失くしたものや異能によってランクわけをされ

そのランクによって、様々な特権が与えられたりする

「そんなこと簡単に俺に言っただけなのかい？」

ひとといにとつてのランクは自分の好きな人を知られるくらい

恥ずかしいらしい。基本的に差別にならないようにランクは

非公開になっているが、それでも、もしバレたらランクが高いと怖

がられるし

低いと馬鹿にされるらしい。『ランクを公表するのは百害あって一

利なし』

というのが島での常識だ。

「まあ、格上げて言うだけならどのランクかわからないでしょ？」

「まあ・・・なあ」

正直いうと、かなり高いランクというのは漠然とわかっていたりする最近教えてもらったことなのだが、高ランクに属しているひとといに多いのは

火や水といった属性系ではなく

音や光などといった特殊なものに干渉できる能力を持った者らしい

風紀委員長は音の能力を使うと聞いたので

間違いなく高ランクに属しているのだろう。

「まあがんばってな」

「がんばってきちゃうわよー」

そういつて長いポニーテールを振りながら風紀委員長は去っていった

放課後。いつもの活動に勤しむ。

内容は簡単、俺が今寝泊りしている寮の寮生を増やそうとしているのだ。

理由は簡単、今現在寮生が俺と紅しかおらず、それを紅は寂しく思っている節があるからだ。

本人は寂しいと言ったことはないが、

俺が入る前はばかりでかい寮に寮長との二人暮らしだったというのを考えれば寂しくないはずがない。

気になるあの娘が密かに胸に秘めた願いがあるならば

叶えてあげるのが、片思いの男子が出来る最大のことだろう。

本音は紅と二人きりだと色々な事が色々妄想をかきたてて色々やばいからんだけどな。

しかし、内容は簡単だが難易度は偉く高い。というのも勧誘している最中にも

青海教信者、もとい青海狂信者、じゃねえや、

青海ファンクラブとの戦闘が待ち構えているのが難点だ。

しかも青海ファンクラブを勧誘してみたところ

「お、おっ恐れ多いわあああっ！」

と断固拒否されてしまった。しかもファンクラブの鉄の掟で

「抜け駆け抹殺」

「距離を大事にしよう」

という二項目に引っかかるらしい。

更に厄介なのが、紅が島民から神格化されていることと、

寮の場所が地上にあることだ。

面積が昔と違い拡張されたとはいえ、狭いこの島では島民の大半の住居が地下もとい海中にあるのが普通なのだ

その中で地上で生活できるのは、相当な位の高い者だけだ。許される役職として具体例を挙げるなら、

ひとといの最高ランクに属する十二人（俺含め。”俺”含め。）や波止場高校の校長やら研究所のお偉いがたなどだ。

しかし、今例に挙げた方々でも地下を好む方々が多い為

実際は地上に住む人間なんて一握りだ。

実際、波止場高校の校長なんて地下の深いところに住んでるし研究所のお偉いがたも研究室にこもりっぱなしなのに、数少ない地上に住居をいただくのは申し訳ない、ということまで地下に住んでるのがほとんどだ。

ということまで島の地上に住むというのは中々勇気がいるらしいそんな中普通に勧誘をしてもそりゃ成功するわけねえか

昨日までの勧誘でようやく難易度の高さを実感した俺はある結論に至った

今日からは小細工もありでいこう。

標的1

生徒会長 来栖久留美

昨日極秘入手した生徒会長の自宅の電話番号に電話をかける

「もしもし、青海紅です。」

「え！？青海さん！？どうなさいましたの！？」

「あのね、紅寂しいの、うん寂しいの。」

「何が寂しいんですの！？」

「あのね、らいかちゃんと……学校でしか会えないことが……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7852u/>

うそつき島流し

2011年10月9日10時58分発行